兵庫県

船坂川が教えてくれたこと

西宮市立山口中学校　二年
前田　直太朗

僕が船坂に引っ越してきたのは、三歳のときでした。船坂は、四季折々の自然に包まれた静かな山里です。耳をすませば鳥のさえずり風に揺れる木々、そしてどこかで流れる水の音。そんな環境に、僕は少しずつ心をなじませていきました。引っ越してから二ヶ月ほど経ったある日、母と散歩をしていた時に一本の川に出会いました。それが「船坂川」です。初めてその川を見たときの僕の心は、ワクワクとドキドキでいっぱいでした。透明な水が岩の間を流れ、小さな魚たちがすいすい泳いでいる。そんな様子の全てがまるで宝物のように感じられました。それから十年以上、僕はこの川とともに成長してきました。川は、僕にとって遊び場であり、学びの場であり、心のふるさとでもあります。小学一年生の夏、初めて蛍を見た夜のことは今でも忘れられません。夜の間にぽつぽつと浮かび上がる淡い光。手のひらに乗せると、蛍は深呼吸をするように体に光を灯していて、それがとても神秘的でした。一匹一匹は小さな命ですが、その光は僕の心に大きな感動をくれました。船坂川には蛍だけでなく、カニやカエル、魚などたくさんの生き物が暮らしています。それぞれがこの小さな川の世界で一生懸命に生きている。そんな姿を見ているうちに、僕も自然の一部であることを実感するようになりました。しかし、そんな川でのある出来事が僕を悲しませました。ある年のゴールデンウイーク、僕は川へ出かけました。ところがそこには、バーベキューの後に放置されたゴミや空き缶、ペットボトルが散乱していたのです。下流には白い泡が浮かび、水もにごっていました。美しかった川の姿はなく、僕はとても悲しくなりました。無言でゴミを拾い、家に帰って母にその思いを伝えると、母は「それは残念だったね」と僕をそっと抱きしめてくれました。でも僕の心はまだ晴れませんでした。そのまま迎えた夏休み、ある日僕は、家族で川へ遊びに行きました。たくさん遊んだけど、気持ちはすっきりしません。次の日、僕はジュースのペットボトルを持って川へ行きました。しかし母と一緒に遊んでいるうちに、そのペットボトルが川に流れていってしまったのです。「あんなにゴミを見て悲しくなったのに、自分が川を汚してしまった」と思ったとたん、悔しさと情けなさで胸がいっぱいになりました。そんな僕を見て、母は静かに川のゴミを拾い始めました。そして、「一緒に拾おう」と言ってくれました。拾い終えたあと、母は僕にこう言いました。「一つゴミを落としてしまったら、気が済むまでゴミを拾い続けなさい。」そのときは、意味が良く分からなかったけれど、今の僕なら分かります。きっとあの言葉には『自分が間違った行動をしてしまったのなら、その分は必ず行動で償いなさい』そんな意味がこめられていたのだと思います。川は僕たちのすぐそばにあります。そして川は海へとつながり、海は地球へとつながっています。僕たちが川を守ることは、やがて地球を守ることにつながっている。そう思うと、自分の行動一つにも大きな意味があると感じます。たとえ一人では何も変わらないように思えても、一人一人が考え、行動すれば、必ず世界は少しずつ良くなっていく。僕はそれを信じています。これからも僕は、船坂川とともに歩んでいきたい。そしてこの川を次の世代にも誇れる姿で残していきたいと思います。